



NPO/
SORUCA
NonProfit Organization/Soft Resources of Urban and Country Association

通信

秋
2018

会員 各位殿

平成30年8月26日

巻頭言

NPOソフトインダストリー研究会

理事長 白石 嘉宏

災害

猛暑による熱中症で亡くなる方、大雨による土石流で被害にあわれた方々。本当にお気の毒です。お悔み申しあげます。

さて、このような災害に対して、311東日本大震災から政府は国土強靱化計画ということで大規模な土木事業で対応をすすめています。当面の弥縫策としては納得ですが、東京では荒川が決壊すると下町の足立区、荒川区はもとより銀座、丸の内などは水面下7メートルになってしまうとのことです。ハザードマップは全国規模で作られているのでいろいろな災害に対して出来ているのでしょうか。猛暑、大雨、台風、竜巻、高潮、水害、雷、寒波、豪雪等々の気象災害。津波、地震、液状化、噴火、土石流、土砂崩れなど地殻などから来る災害、と並べてみたらいくつでも出てきます。

私たちの住む日本は江戸時代3000万人、大正時代5000万人、私が産まれた戦前は7000万人、それが今では12,600万人。当然増えた人たちはそれまで使われていなかった所に住むこととなります。地震による液状化したところはもともとが湿地、海辺の埋め立て地などです。

さて、ここいらで視点を変えてはどうでしょうか。我が国は毎年人口が減り2050年には1億人を切り90年後の2110年には4300万人になると予測されています。国家100年の計。人口減少を逆手にと

って安心安全な暮らしの国をデザインする、嘗て田中角栄氏が日本列島改造論を唱えました。

今度は日本列島安全論を産官学一体となって計画づくりに取り組んではいかがでしょうか。

世界人口は今や76億人、さらに増え続けています。そういう時に二酸化炭素を吸収する緑の森とその根に貯えられた水を元とする清流。絵葉書になるような田園風景。そうして広い歩道と自転車の並木道、高層ビルは耐用年数が来る毎にヒューマンサイズに建て替える。世界中があこがれる美しく安全な国へ。

そうして大切なことは災害とその対応、減災教育を小学校から始めることです。始めは地球の勉強から。そうしておけば地震と津波そこに人災が重なる福島原発事故(人為災害)など起こらなくなるでしょう。もう一つ人と人同士が争う戦争についても。

SORUCA 通信 contents

- 巻頭言 / 災害 / 白石 嘉宏
- 日本の遊び文化は進化しているのか / 坂倉 海彦
- 現代 (昭和・平成)の鎖国国家日本
～世界の潮流に背を向けて規制を続ける愚行～ / 奥原英彦
- 「見たことしたこと」 白石回想録 15 / 白石 嘉宏
- 編集後記 / 渡辺 勝範



日本の遊び文化は進化しているのか

坂倉 海彦

人口が高齢化と減少に向かい、ものの需要が増えなくなっていく時代において時間消費需要が増えていくのは必然である。時間消費需要の中で広い意味での「遊び」はきわめて大きな存在である。そういう背景を意識しているか否かは別として、総合リゾート整備法（IR法）が成立した。カジノを解禁し、カジノを含む複合リゾートの整備を進める投資を促し、日本の観光の国際競争力の一層の強化を図るのが狙いのようだ。IR法には反対論も根強いが、そのほとんどが、簡単に言えば「博打依存症を増やすのではないか」という倫理的な懸念であり、本来議論されるべき、時間消費社会における遊びの在り方、これからの時代におけるその重要性、事業に取り組む関係者が外してはならない理念や哲学などについての議論に不幸にして筆者は接したことがない。

IR法を巡る動きなどを見てみると、30年前に国が主導して進めたいわゆるリゾート法の悲惨な失敗の歴史から、この国はなににも学んでないのかと思いたくなる。筆者は1980年ころからスキー場産業に関わるようになり、市場の一時的なバブル化に踊って結果的に悲惨な結果を歩んだスキー場産業をつぶさに見てきた。遊びを含む様々な事業、産業は経済行為としての側面しか見ていないと決して成功することはないのに、スキーバブル時代の関係者はそのことを自覚せず、筆者が講演などでその危うさを指摘すると聴講者のほとんどに馬鹿にされたものである。

日本人はまじめでモノづくりなどの才能はたけているが、レジャーなどの遊びは苦手で、そのため国内に世界に誇るリゾート、レクレーション施設などができないし、国も大企業も力を入れようとしないのだ、という考え方はそのころから多くの日本人の常識であるかのようにとらえられていた。そこで「日本も先進国の仲間入りをしたのだから、これからは国民がゆとりを持ちレジャーを楽しめるように環境整備を国が主導して進める必要がある」というのがリゾート法の趣旨だったと思う。日本人が全般的にモノづくりなどにまじめであるのは事実であろうが、それだからといってレクレーションの場を生み出す能力が無いわけではないと考えるべきではないだろうか。

筆者は東京生まれの父と宮崎県生まれの母の間に生まれたが、1950年代後半の中学2年から高校2年までの多感な時期に母方の祖父が宮崎県の要職に就いたため、毎年夏休みを宮崎で祖父、祖母と暮らすことになった。都会育ちで地方都市や田舎を知らなかった筆者にとってその経験は、人格形成上にも基礎的な思考力の向上にも重要な影響を与えてくれたと思う。東京ではめったに味わえない自然環境の中で様々なことを知り学んだが、大変感動したのが「こどものくに」という青島の近くの海岸にあった小さな遊園地である。

ここでは「ここはこどものくにです。おとなもこどももここではこどもになってたのしみましょう。だから入場料は大人も子供も10円です」というサインがあった。園内は決して立派な施設があるわけではないが、自然の景観を生かした南国的な雰囲気が心地よかった。そして当時の遊園地のどこにもあった何とかキャラメルのお店の入ったベンチや広告看板類が全くない。また園内には全くごみが落ちていないなど様々なことを感じ、この遊園地が好きになって軽便鉄道やバスに乗ってよく通った。10代の頃にこれらのすべてに気が付いたはずがないし、ごみが落ちていないのは、ごみがあると従業員がすぐに拾って目立たないごみ箱に捨てるからなのだがそれを繰り返すうちにお客がごみを捨てなくなった事など、大人になってから知ったことが記憶の中に追加されたのだと思うが、その当時にも相当のインパクトを受けたことは間違いない。

時代は変わって1980年代東京ディズニーランド開業、遊園地を子供の遊び場から家族で楽しむ場に変えたディズニーの思想を世の中は大歓迎して受け入れた。またゲスト（客）がごみを捨てるとキャスト（従業員）がすぐにそれを拾って園内はいつもきれいに保たれるという運営にも拍手が集中した。ディズニーランドは全く新しいコンセプトの遊園地として歓迎されたのである。

しかし筆者にはそれは規模こそけた違いだが、片田舎の宮崎の「こどものくに」と全く同じではないかと思った。今回調べてみると「こどものくに」は何と1939年という戦前に開業している。アメリカのディズニーランドの開業が1955年であるから、「こどものくに」はディズニーランドの真似をするどころかはるかに先んじてあのコンセプトを実現していたのである。決して日本人にレジャーの場に対するオリジナリティーが無いわけではないのだろう。もっとも「こどものくに」は宮崎交通創業者の岩切章太郎さんという日本の観光業界の歴史上もっとも偉大な方（と筆者は信じている）がおられたからこそ実現したのではあるが。

さらに時代は変わり1995年、筆者は結婚後妻を一度も宮崎に連れて行ったことがなかったことに気が付き、久しぶりに行ってみることにした。後にリゾート法適用の最大の失敗例と言われるようになったシーガイアが前年に開業していたので、当然行ってみた。そして呆れ、怒りが湧き出し、これは間違いなく失敗すると確信した。

シーガイアは大規模リゾートホテル、ゴルフ場、オーシャンドームと名付けられた巨大なインドアビーチの複合施設であるが、この施設を開設した場所は、葉が一本の珍しい松に覆われた一ツ葉と呼ばれる美しい海岸の一角で、夕方には浜辺にトビハゼがたくさん集まってくる静かな入り江もある幻想的な場所であった。中高校生のころ、ひと夏に一度か二度そこにある小さな料理屋に連れて行ってもらったが、うっとりする程美しかった思い出がある。なんとその自然を破壊してシーガイアなるものを作ってしまったのである。自然の恵みや美しさを活用せず、それをわざわざ壊してリゾートなるものを建設したのである。そしてそのリゾートたるやいくらでも自然のままのビーチという本物を楽しめる南国でインドアビーチという偽物を作り出したのである。もちろんインドアビーチならではの光や音響を駆使してのエンターテイメントを提供していたが、そんなものが自然の奥の深い魅力に勝てるはずがない。後日聞いたゴルフ関係者の話によると、シーガイアのゴルフ場はコースも2流で、隣の高層ホテルの影がゴルフコース上に出来るという無神経な設計であるという。

宮崎に住んでいる知人に筆者の感じたシーガイアの印象を話すと、地元の人もみんな「すぐに行き詰まる」と感じており、「岩切章太郎さんが生きておられたら絶対にあんなものは作らせなかっただろう」というのが多くの県民の意見だという。戦前にディズニーランドに先駆けたコンセプトの元に生まれ、一貫した理念をもって育ててきた、小さくて質素な「こどものくに」に比べて、国の政策に踊り大金を投じて作られたシーガイアの何たるお粗末さか。かけた金はおそらく何万倍以上であろうが、根本にしっかりした哲学や理念がないと巨大なマネーを捨てるだけでなく、復元不能の環境破壊をもたらしてしまうという見本のようなものだ。

遊び文化を成熟させ国民が楽しい人生を送れるような社会を作り上げることが大きな課題となるこれからの時代に向けて、そろそろ遊び文化の哲学や理念についての真剣な議論を始める時ではないだろうか。日本人は必ずしもこの分野で才能が無いわけではないのだから、...

「現代（昭和・平成）の 鎖国国家 日本」 ～ 世界の潮流に背を向けて規制を続ける愚行 ～

奥原英彦

1. 加計学園問題の本質は何か

今年の春先から、森友学園とともにマスコミや野党の標的になった「加計学園」に絡んでは、7月25日付けで経産審議官柳瀬唯夫氏が退任し、更に8月5日付けで藤原豊氏の内閣府審議官兼務を解き経産省大臣官房付とする人事が発表されました。

この「加計学園」の経済特区を巡る野党や追求や新聞報道の中で、産経新聞のみが「なぜ獣医学部の定員は長きにわたり抑制されてきたのか 規制で縛る愚 加計学園獣医学部（2017年11月10日）」と本質的指摘をしており注目されます。

この「本質的指摘」を少し解説するなら、次のようになります。「獣医学部設置は1966年以降無く、入学定員も1975年から16大学930人態勢で変わらない。（人間の高齢化と医療需要増大と同様に）ペット化と獣医需要が増大してきているにもかかわらず、獣医師数は相対として足りているとする農水省の見解を踏まえ、文科省は定員抑制方針を固持している。その結果、海外の大半の国ではフィラリア予防薬が家庭薬（一般薬）として200円/錠程度で入手可能であるのに対して、日本では処方薬（動物病院で診察しないと販売されない）として2,000円/錠と世界の10倍の価格である。しかも、海外からの（ジェネリック）並行輸入を防止するため、「フィラリア予防薬は危険だ」（農水省動物医薬品検査所副作用情報データベース）とのキャンペーンが展開されている」。

2. 現代の悪しき規制は鎖国と同じ

つまり、「獣医学部定員抑制」問題とは、「獣医師会」「獣薬業界」「農水省」「文科省」がタッグを組んで、世界の潮流やペットの飼い主の利益に逆行する「規制」で、社会や国民を縛っていることに他なりません。

一方、産経以外の他紙は、柳瀬氏や藤原氏が「言った（言わない）」「会った（会わない）」の偏向報道に終始しており、国民の目を本質から逸らそうとする「世論操作」を感じます。なぜ、このような「操作」が生じることになるのでしょうか。マスコミの「忖度（そんたく）」でしょうか。国民から選挙によって選ばれた政治家や偏差値の高い大学出の官僚が、また、インターネットで瞬時に世界の情報が入手できる読者を持つマスコミが、このような歪んだ世論操作に手をそめるのでしょうか。

私見としての回答は「はい」です。徳川幕府による宗教と貿易の独占管理を目指した「鎖国」と同様に、加計学園や同種の問題など、現代の悪しき「規制」によって、国民経済の「公正」

は著しく歪められてしまっているのです。これでは、まるで「鎖国」と同じです。

3. アダムスミスによる「体系重視」人間の糾弾

18世紀、需要と供給の関係（バランス）は「市場（神のみえざる手）」によってもたらされると説いたアダム・スミスは、一方で、この自由な社会が成り立つ前提として「正義」が必要であり、個人には「不正」を排除する「道德感」を、国家には「厳格に社会構成員を管理しない」「寛容さ」が必要と説いています。特に、厳格に社会構成員を管理できるという「幻想」を持つ者は、（自分自身がとても賢明であるとうぬぼれる）「体系重視」の人間として、厳しく「糾弾」しています。

日本の「鎖国」は、キリスト教を禁止し貿易を独占し「厳格に社会構成員を管理できる」と考えた徳川幕府によって行われましたが、現代の「鎖国（規制）」に関わる人間は、この「体系重視」の人間が多いのに驚かされます。

4. 現在の「体系重視」人間は「鎖国マフィア」へと変質する

特に、最高学府の卒業生は、役所や会社に入ると、下記の通り、現代の「体系重視」人間に成長（変質）し、鎖国マフィア化していくようです。

（1）古臭い「法律」体系の自縛により、国際的な社会や市場動向に乗り遅れ、「開国」的な人間を葬ることが「法治」と勘違いしてしまう。

（法学部卒の水戸藩化）

（2）イノベーション性の少ない「技術」体系に甘んじ、護送船団方式の「ぬるま湯」に浸ってしまい、社会を変革する気概に欠けてしまう。

（工学部卒の草食男子化）

（3）日々の取るに足らない情報（ニュース）「報道」体系に熱を上げ、国際動向の視点から国民に必要な情報提供を行わず、結果として「既存利権構造の維持」に終始してしまう。

（文学部卒の欺瞞化）

（4）標準的「薬漬け」体系の施術を、獣医師の本分と信じ込み・勘違いしながら、日本の国家財政と国民の生命を蝕んでいることに気づかない。

（医（獣医）学部卒の狂信化）

今回は、獣医学部卒マフィア問題を取り上げましたが、工学部卒マフィア問題（例えば、「お掃除ロボット」を販売出来ない技術者達）、文学部卒マフィア問題（例えば、「日本版CNN」を作れないマスコミ関係者達）、医学部卒マフィア問題（例えば、「抗がん剤治療」を止められない医師達）など、我が国には、多くの未報道「鎖国」問題が存在します。これらは、別稿にてお書きしたいと思います。

「見たことしたこと」 白石回想録—15

(名前の前に*がついている方はネットで検索いただくとわかります)

昭和47年4月財団法人余暇開発センターは設立発足しました。私は勤めていたジャパン・タイムシェアリングシステムの決算など年度末の作業があったのでこれらを片付けねばならず、余暇開発センターへの正式移行は6月1日からになりました。事務所には通産省から総務課長として電子政策課に居た茂木得男さんが待ち構えていました。業務山積です。まずは設立パーティ、当該年度の事業内容の確定、それに伴う事業補助金の申請、民間企業からの出捐金の受け入れ、9月虎ノ門に出来る虎ノ門三井ビルの内装仕様、先ずはここまでが夏になる前まで。事務所が帝国ホテルですから月曜から金曜日までは泊まり込み。残業時間は少ない時で160時間、多い月は200時間を超えました。おかげで給料は倍以上になりますが、このお金を使う暇がない。

パーティの案内状は毛筆での筆耕です。短期間に多量に出すので大学の書道部の学生を動員しました。パーティには*賀屋興宣さんなど戦前からの大物政治家が多数来て下さいました。そのため丸の内署から警備のため私服の警察官が出入り口など多数配置されました。

佐橋理事長にはテレビ出演の他、地方からの講演依頼も。どこの講演会だったか覚えていませんが、カバン持ちとして初めてのお供で驚いたのは東京駅に着いた時駅長室に招き入れられ駅長からお茶の接待を受け、列車に乗るところまで見送りに来てくれました。着いた駅でも駅長が迎えに出ていて駅長室で同様お茶の接待を受けました。そこからが大変でした、講演までに数か所、講演が終わって歓迎会、出てくる飲み物は全てアルコールです。宿の部屋に入るや否や、理事長は洗面台に水を一杯張り顔を埋めて水をがぶ飲みです。顔を上げると、「白石お前飲めるだけの水を飲め」と言われました。私も水が飲みたくて仕方がなかったので理事長に習って洗面台に顔を埋めて飲める限りの水を飲みました。

「白石、行政官は40カ町村の盃をこなせなければ勤まらんのだ」と言われました。翌日も朝食が終わらないうちに迎えが来て、また、アルコールです。接待する方はお茶では失礼だからビールか日本酒を出さねばとのことですが、受ける方にとっては拷問です。これに懲りてその後はアルコールは夜の会食だけにしたいと事前に相手方に連絡し、アルコール地獄から逃れることが出来るようになりました。

今は見かけませんが当時色鉛筆というと半分が赤、半分が青。一本で赤と青の色が使えるようになっていました。私が文を書いて、これでよろしいでしょうか？ と伺うと、「お前な～、日本の義務教育は中学までだ、その子供たちが読んで解る文を書け」と

言われ、ありがたいことに色鉛筆の赤の方で持って行った文を直して下さるのです。このようなやり取りがあったので今のような文を書くようになりました。余談ですが、「お前は赤線と青線を知っているか？公娼の許可が出ているところを赤で囲ったんだよ。そうでなく許可の無いところでの営業を青で囲ったんだ」と赤と青が半分ずつの鉛筆を持って話してくれました。理事長はお座敷接待を受けた時代のエースですから芸達者です。でも彼が宴たけなわになるとかくし芸を出します。秘書だった村上（結婚後は高橋）さんは「やめてください」と懇願しますが理事長は構わず。そのかくし芸は発情期のロバの鳴き声です。理事長は中国戦線に従軍しました。日本の陸軍はドイツのように機械化された機甲部隊ではありません。歩兵は担える限りの荷物を背負いひたすら歩きます。歩兵が持てない荷物を運ぶのがロバなのです。このロバに盛りが来ると雌を呼ぶのに独特の声を出して啼くそうで、理事長はそのロバの声が耳から離れないままかくし芸のメニューにロバの鳴き声を加えたのです。中国戦線では兵站が伸びて物資の補給が十分ではなく、そのため2～3発小銃を撃つとすぐに「突撃」となったそうです、弾丸の補給が間に合わなかったのです。余談が長くなりました。

8月に向けて通産省内で次年度の事業内容の検討作業が続きます。大蔵省との折が始まります。この作業がパーティの準備と並行して始まりました。前回の会報で書いた宮野さんからハッパがかかります。夕方彼が来て指示がありそれから彼は企業からの接待を受け出かれます。10時ごろ戻ってくると皆で作った企画内容を見て修正を指示します。「明日の朝8時に見に来ます」と言って帰ります。彼からOKが出ない限り先に進みません、また修正作業に取り掛かります。当時は今のような計算機が高価でしたから台数は少なく、手回し式のタイガー計算機も有ったかと思います。コピーは所謂湿式の青焼きです。パソコンもプリンターもゼロックスもない時代です。手書きで書いた原稿を薄緑色の印画紙の上に載せてローラーの中に通すのですが印画紙と原稿が一緒に現像液の中に取り込まれることがママあります。一度現像液にぬれるとその原稿は使えなくなります、そうすると亦一から書き直しです。相変わらず泊まり込み残業160時間を超える状態が続きます。身体を壊さないよう食事代は十分な金額が用意されました。このタコ部屋状態は虎ノ門三井ビルに移るまで4か月続きました。でも過労で体を壊す者は出ませんでした。ドーパミンが一杯出っていたのでしょう。



<編集後記>

今夏の暑さは尋常ではない。観測史上初の異常気象である。気温40℃超えもそうだが、記録的短時間大雨による豪雨災害は自然からの警告である。

治水は治国の礎であるが、山からは土砂の流出、都市河川の洪水、海からは津波。改めて、住まいの地区のハザードマップを検索してみよう。そこに住むことの危険がどんなものか知ることが命を守ることだと思ふ。(渡辺)



「特定非営利活動法人ソフトインダストリー研究会」広報誌
SORUCA 通信 (2018年秋号)

発行責任者 白石 嘉宏
発行所 NPO ソフトインダストリー研究会
東京都新宿区矢来町 47 番地
TEL: 03-3266-1769
FAX: 03-3266-1764

<https://soruca.org/>
編集人 渡辺 勝範・長谷川 毅
発行日 2018年8月26日



発行元 :NPO ソフトインダストリー研究会